様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　 ９ 月 １７ 日現在

機関番号：２３１０２
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｈ０１２０４

研究課題名（和文）ヘーゲル美学講義における絵画論の芸術哲学的な意義とボアスレ・コレクション

研究課題名（英文）Die kunstphilosophische Bedeutungen der Hegelschen Lehre vom Gemaelde in der Vorlesungen ueber Aesthetik und die Sammlung Boisseree

研究代表者
石川　伊織（Ishikawa, Iori）

新潟県立大学・その他・名誉教授

研究者番号：５０２９００６０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　11,300,000円

研究成果の概要（和文）：ヘーゲルの芸術哲学講義の資料源泉の一つとなったSulpizとMelchiorのBoissereeの兄弟とJohann Bertramによる絵画コレクション（ボアスレ・コレクション）の全貌を、現存する絵画作品の調査に基づいて明らかにするとともに、ボアスレおよびその周辺が残した日記・書簡等の資料を基に蒐集過程についての事実関係を明らかにした。また、ボアスレが取り結んだ古典派とロマン派の関係を、同時代の画家の研究とゲーテによる評論をもとに考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
ヘーゲルはそれまでの伝統的な「美学＝Aesthetik」を「芸術の哲学＝Philosophie der Kunst」に転換する。そのためには、具体的な芸術体験が不可欠であったはずだが、伝統的なヘーゲル美学研究は、作品や事実関係を顧みることなく、体系上の位置づけのみを論じてきた。これによってもたらされたのが、ヘーゲル美学すなわち芸術終焉論という偏見である。本研究は、事実に基づかない思弁に終止符を打つために、あくまで事実に即して、ボアスレの友好関係の背後にいる多くの同時代人とともに時代精神を共有していたはずのヘーゲルの思想を、哲学史・美術史・美学史の諸側面から考察する。

研究成果の概要（英文）：Hegel’s lectures on “philosophy of arts” were based on his experiences of arts. One of the resources of his thought on the paintings was the Boisseree-collections by Sulpiz and Melchior Boisseree Brothers and Johann Bertram. We researched and made clear the present situation of the works included in the Boisseree-collections and the process of their collection. Main materials of our research are the older and newest catalogs of many museums and the diaries and letters of Sulpiz Boisseree. He had connected the thoughts of classicism (for example J. W. von Goethe) and of romanticism (A.W. Schlegel and F. Schlegel). Hegel also cultivated a friendship with S. Boisseree, but he had another point of vier with Boisseree and F. Schlegel. We tried to make clear the relations among Boisseree, F. Schlegel, Gethe and Hegel.

研究分野：ヘーゲル美学

キーワード：美学　ヘーゲル美学　18-19世紀美学史　美術史　絵画論

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

ヘーゲル自身が 1820/21 年講義の冒頭で宣言した通り、彼の「美学」は「芸術の哲学」であって、「芸術を純粋に精神的なものと感性的なものとの結合剤」と位置付けるものであり、したがって伝統的な意味での「感性の学」ではなかった(1)。そのためもあって、美学研究者の間ではヘーゲルは重視されているとは言いがたい。ヘーゲル美学講義に関心を示すのは専らヘーゲル研究者であって、しかも、体系上の整合性にのみ配慮して、芸術の終焉ばかりを議論してきた。この背景には、1807 年の『精神現象学』で示されたロマン派に対する批判(2)を根拠に、ヘーゲルを反ロマン派・親古典派に位置づけようとするヘーゲル研究者の「常識」がある。こうして、ヘーゲルの芸術哲学を実際の芸術作品と結びつける努力は放棄されたのである。研究代表者を中心とする先行研究「ヘーゲル美学講義に結実した芸術体験の実証的研究」（2014-2018 年 基盤研究(B) 課題番号 26284020）（以下《2014-28 研究》と略記）(3)は、ヘーゲルが実際に見た絵画作品を具体的に示すことを通して、ヘーゲルの絵画論がロマン派に対しても古典派に対しても両義的なものであったことを明らかにした。この事実はさらに、ヘーゲルに影響を与えた絵画蒐集家や画家あるいは思想家との交流を通して、また彼らの残した文献を通して、実証される必要がある。こうした視点からのヘーゲル美学研究はこれまで皆無であった。

２．研究の目的

本研究は、《2014-18 研究》をさらに一歩進めて、ボアスレ・コレクションをめぐる歴史的な事実を実証的に明らかにするとともに、これまでヘーゲル哲学研究の中でしか扱われてこなかったヘーゲル美学、特に絵画論に関する研究を、美学・美術史の中で検討しなおすことで、ヘーゲル絵画論さらにはヘーゲル美学の特異性を哲学的に解明することを目指す。これを実現するために、以下の研究目標を定めた。

(1) ボアスレ・コレクションに含まれていた作品の現状についてのデータを、《2014-18 研究》の成果をベースに完全なものとすること。これらの絵画作品の多くについて、現在では画家名と作品名の再検討がされている。当時のボアスレやヘーゲルが、これらの作品を、誰の何と題する作品とみていたのか、どのような歴史的背景を以て制作されたと考えていたのかは、現在のわれわれの見るところとは全く異なっていたと考えられる。この問題を糸口にヘーゲルの絵画論の実態に迫る。

(2) ヘーゲルの論述の根拠を先行文献および同時代の文献から明確にすること。ヘーゲルが実際には見ていないことが判明している作品については、その知識をどこから入手したのかを明らかにすること。詳しく言うと、①ヘーゲルが手に取ることができた美術書、②ヴィンケルマンやヴァザーリ等の文献、③シェリングのイエナ美学講義およびシュレーゲル兄弟の評論等の同時代の文献、④ゲーテの『色彩論』、『芸術と古代』等の著作をとりあげ、これらとヘーゲルの絵画論とを対比させる研究である。これらのテキストを分析し、ヘーゲルの美学講義のテキストと対照して、ヘーゲルの独自性・特異性と同時代性とを明らかにする。ナポレオンはヨーロッパ各地から美術品を略奪したが、ヘーゲルの美学講義はどれも、ナポレオンの失脚に伴う美術品の返還以後の議論である点が需要である。ナポレオン失脚以前に展開されたシェリングのイエナ美学講義、A.W.シュレーゲルのベルリン美学講義、F.シュレーゲルのルーヴル評等とは、ヘーゲルが実際に見ていた作品群の在り方が異なっているのである。本研究はこれを根拠に、ヘーゲル美学講義を再検討する。

(3) 同時代の画家・美学研究者・哲学者等の多くがボアスレ・コレクションとの関係を有する。これらの人々とヘーゲルとの関係を、ボアスレを媒介として検討する。とりわけ、ズルピツ・ボアスレの日記と書簡集は重要である。ここにはシェリングやシュレーゲル兄弟らとの書簡も含まれている。また、ヘーゲル最晩年の肖像画を描くことになるシュレジンガーや、ゲーテのもとでヴァイマールの美術学校の運営に関わることになるヨハン・ハインリヒ・マイヤー等の同時代の画家についても考察する。

３．研究の方法

以上の目標を達成するために、以下の具体的な研究活動をおこなった。

(1) ボアスレ・コレクション研究：①1827 年のボアスレ・コレクションの売り立て目録を、それに対するフィルメニヒ＝リヒャルツによるコメント(4)とともに検討し、②各美術館の WEB サイト、また③最新の美術書をも参照しつつ、ズィーフェルトの研究(5)に見られる錯誤を正した。バイエルン州のいくつかの絵画館に分散展示されているボアスレ・コレクション作品の調査も行った。参考作品群として、ベルリン絵画館とドレスデン・アルテマイスター絵画館所蔵の作品の調査も考えたが、今回の調査ではボアスレ・コレクション作品研究に注力することとして、できる限り多くの作品を掘り起こすことを目指した。

(2) 文献資料研究：すでに手元に蓄積していた資料に加えて多くの美術館カタログを入手することができた。①最重要の文献はボアスレの日記と厖大な書簡である。これを詳細に検討する。②19 世紀の美術書の記述と現代の美術書の記述を突き合わせ、現代とは異なるボアスレやヘーゲルの視点を解明することを試みた。③特に古典主義との関係でヴィンケルマンの研究に注力することとした。ヴィンケルマン自身の著作だけでなく、ゲーテの『ヴィンケルマンとその世紀』

を通して、ゲーテの古典主義との接合を図った。④同時代の美学・美術評論としては、シェリングの『イエナ美学講義』や A.W.シュレーゲルの 1801 年の『ベルリン講義』だけでなく、同じく A.W.シュレーゲルの雑誌『アテネーウム』における絵画論、F.シュレーゲルの『オイローパ』誌上における絵画論、ゾルガーの『美学講義』など、数多くの美学・美術評論を検討した。特に、F.シュレーゲルの『オイローパ』での評論は、ボアスレとの緊密な関係の中で執筆されたもので、ボアスレの日記と比較して読み進めることとなった。⑤ゲーテに関しては、『色彩論』に加えて、『芸術と古代』を検討することとした。この著作はゲーテがボアスレ・コレクションについて言及している重要文献である。

(3) ヘーゲル周辺の画家についての研究：古典主義とロマン主義の間で独自の立場をとっていたヘーゲルを美術史・美学史の中に位置づけるため、文献に基づく研究に加えて、ボアスレの友好関係を画家の影響関係のもとに考察する。ヘーゲルが批判している同時代の画家の多くがボアスレ人脈の中に含まれている。ロマン派絵画を専門とする共同研究者の助言をえながら、ヘーゲルの批判の焦点がどこにあるのかを明らかにする。

４．研究成果

(1) 今回の共同研究では、冊子の形態での研究報告書は作成せず、WEB 上に研究報告のためのサイトを設定することとし、現在これにアップロードする論文・資料を編集中である。ここに掲載される最大の資料は、①ボアスレ・コレクションに含まれる作品の現在の状況についての最新データである。これには、作品の帰属や画題についての評価がこの 200 年間にどのように変化してきたかを示す資料と写真図版を掲載する。②翻訳は、a) 2014-18 研究の際の研究分担者で、今回は 2021 年まで研究協力者として加わっていただいた柴田隆行元東洋大学教授が訳出したボアスレの日記と書簡の抄訳を、最新資料と現地調査の結果をもとに修正し、必要な注釈を施したテキストをメインとし、b) ゲーテ『芸術と古代Ⅰ1』「ハイデルベルク」、同『芸術と古代Ⅴ1』「ボアスレの芸術の業績」（ともに翻訳・注釈・解説）、c) ヘーゲルの同僚であったゾルガーの絵画論関係の書簡を考えている。これにさらに、③研究分担者それぞれの執筆する論文を掲載する予定である。

(2) 本研究で明らかとなったのは、ボアスレが想定した画家名が（したがってシュレーゲルやヘーゲルやゲーテが信じていた画家名が）多くの作品で 19 世紀半ば以降に修正されていることであった。これは、彼らが「何を見たのか」という以上に、「何を誰の作品として見たのか」という問題を浮かび上がらせる。ボアスレの 1827 年の売り立て目録では、かなりの作品を「ヤン・ファン・エイクとその画派・弟子」の作品としているが、現在エイクの作品と見なされているものは 1 点もない。また、ボアスレの理解では、フランドルやネーデルラントの作品も「ドイツ絵画」に含まれている。ボアスレの育ったケルンはオランダ・ベルギーとも近く、彼の理解では同一文化圏に属するということなのであろう。しかし、この理解は、フランス革命とそれに続くナポレオンによる芸術作品の略奪という時代背景をもとに考えるなら、革命によって喚起されたドイツ・ナショナリズムの特異な一面を物語るものともいえよう。一般に、ロマン主義は古いドイツへの回帰を主張するナショナリズムの側面を持つとされるが、ボアスレのドイツ回帰志向は、「ドイツ」をネーデルラントやフランドルまで拡大解釈した「大ドイツ」なのであった。この問題は、「ドイツとは何か」という問いを喚起する。

(3) 他方、ボアスレは、これらの「ドイツ」絵画がビザンツ絵画の影響下に成立したとする。ボアスレが蒐集した作品に多く見られる、金地に極彩色で描かれた宗教画を、ボアスレは「新ギリシア様式」と名付ける。ボアスレの「ドイツ」は、「ロマン派」の語源であるローマないしはロマネスクへではなく、ギリシアに直結するのである。一方、古典派はギリシア・ローマの合理性を理想とするとされるが、古典派を代表しているゲーテが関心を示したのは専らローマであった。日記の中でボアスレは、ゲーテのローマ趣味を「狂気」とまで言って茶化す。エイクの故郷を訪ねた際のボアスレ自身の歓喜のなかにも、この種の狂気を見ている[(6)]。ここには、ロマン派＝中世ドイツ趣味、古典派＝ギリシア志向といった教科書的なステレオタイプでは説明できないものが存在している。問題はむしろ、自らの思想上の立脚点をどのようなものと見、これを過去のどの文明・文化に見出そうとするのか、である。現在の学説とは大きく異なる「新ギリシア様式」の用語は、ボアスレとの書簡のやり取りを通して、F.シュレーゲルもまたこの用語を採用しているし、ヘーゲルの『美学講義』中にもこの語は散見される。これを見るかぎり、古いドイツ絵画の中には「新ギリシア様式」があったとするこの理解は、ロマン派か古典派かの垣根を越えて、ボアスレと友好関係を持った人々、ボアスレのコレクションに大きな感銘を受けた人々の間で一定の共有を見ていたことは明らかである。

　ボアスレの蒐集した作品群に魅了されながら、自らの思想上の立脚点をどのようなものと見、これを過去のどの文明・文化に見出そうとするのかという視点の違いのゆえに、F.シュレーゲルとヘーゲルとゲーテとは、それぞれに異なる思想を展開することとなる。同じくオランダ絵画を高く評価しながら、宗教画に力点を置くボアスレに対して、ヘーゲルは風俗画を高く評価する。そこにあるのは、絵画が Lebendigkeit＝生き生きとした様を表現するものであって、神々や聖人が問題なのではないのだという、ヘーゲルの主張である。ヘーゲルはこの点で、絵画を「ロマン的な芸術作品」であるとするが、ヘーゲルの理解では、古典的な芸術は必然的に《ロマン的なもの》に移行せざるを得ない。古典的芸術の典型である彫刻は Lebendigkeit を表現できないからである。とはいえ、絵画もまた、人物の置かれた背景によってかろうじて生命を表現するのであっ

て、音楽や演劇のような時間芸術、すなわち生身の人間が時間の中で演じるという芸術ではない。《ロマン的芸術》の到達点は時間芸術である、ということになる。

とはいえ、《ロマン的芸術》に係ることがすなわちロマン主義に与することであるわけではない。むしろ、《ロマン主義》という語に F.シュレーゲルが込めたそもそもの意味と、これを様々に解釈した同時代の多様な理解が、微妙なニュアンスの差異を含んで胸像していた、というべきであろう。本研究では、この微妙なニュアンスの差異を際立たせるための基礎資料を提供しえた、と考えている。

(4) ボアスレ・コレクションに含まれていた作品のうち 20 点ほどが行方不明であったり、戦後処理のために故地に返還されたりしているが、大部分がバイエルン州内に現存しており、バイエルン州立絵画コレクションの管理下にある。しかし、作品はバイエルン州各地の絵画館に分散展示されている。これには、その地に所縁のある画家の作品を他のコレクションとともに一堂に展示するといった、美術館運営上の理由もあろう。それよりも、これらのすべてが展示されているわけではないという問題、さらには、祭壇画には背面が存在し、通常の壁面展示では裏側の絵を見ることはできないといった問題もある。こうした困難さのゆえに、ボアスレ・コレクションの全体を把握しきれたとは言えないのが現状である。そもそも、祭壇画の背面を別の一点の作品と見なすかどうかによっても、実はコレクションの属する作品の総数が変わってくるのである。背面の作品に対しては、ボアスレは別の番号を与えてはいない。他方で、たとえば三面祭壇画の場合には、祭壇を開いた状態で目にすることのできる 3 点の作品に、それぞれ別の番号を与えている。これに対して、バイエルン州立絵画コレクションの目録では、中央パネルと左右両翼の 3 点に同一の番号を与えている場合もあれば、別々の番号を与えている場合もある。収蔵館に研究への援助を仰いで、詳細を調査する必要があるだろう。こうしたなかで、ケルンのヴァルラフ＝リヒャルツ美術館では、祭壇が立体的に背面まで展示されていたことが重要であった。これによって、背面の探索の重要性を改めて気づかされたのであった。こうした状況下ではあったがバンベルクの絵画館に寄託されている全作品 30 点以上を直接見ることができ、ニュルンベルクのゲルマン博物館では学芸員との歓談を通して多くの情報を教示いただき、貴重な体験ができた。

(5) バウムガルテンによる「美学」の語の創始以来、ヘーゲルの芸術哲学講義に至るまでの「美学」を標榜する著作を振り返る限り、1801 年から始まる A.W.シュレーゲルのベルリンでの公開講義[7]が転機であることは疑いえない。ヘーゲルの芸術哲学講義に見られるような、芸術の全分野を網羅するような「美学」の構想はここに始まる。実際、18 世紀末まで、バウムガルテンとその弟子筋の著作で言及されているのは、ギリシア・ローマの古典文学だけだからである。ここには、さらに探求しなくてはならない課題があろう。加えて、ヘーゲルの芸術哲学講義と前後して、ベルリン大学ではゾルガーやシュライアーマッハー、ショーペハンウアーらが美学講義を行っている。ここにも、何等かの時代の要請があったとみるべきだろう。これらの課題についての検討は、今後の研究課題としたい。

(6) 作成中の WEB ページでは本研究で得られた資料と考察を可能な限りドイツ語と日本語の両言語で記述することとしたい。ヘーゲル絵画論の資料源泉としては、さらに、ベルリンの絵画館とソリー・コレクションがあげられるが、これに関しても今後の研究課題とせざるをえない。

＜引用文献＞

(1) *Georg Wilhelm Friedrich Hegel Gesammelte Werke* Bd.28-1. *Vorlesungen über die Philosopie der Kunst.* Hrsg. von Niklas Hebing. Nachschriften zu den Kollegien der Jahre 1820/21 und 1823. Hamburg (2015) S. 1. ヘーゲル『美学講義』（石川他訳・法政大学出版局、第 2 刷 2019）P.5

(2) *Georg Wilhelm Friedrich Hegel Gesammelte Werke* Bd.9. *Phänomenologie des Geistes.* Hrsg. von Wolfgang Bonsiepen und Reinhard Heede. Hamburg (1980).

(3) 報告書『ヘーゲル美学講義に結実した芸術体験の実証的研究』（研究代表者：石川伊織）(2019)

(4) Eduard Firmenich-Richartz. *Die Brüder Boisserée.* Erster Band. *Sulpiz und Melchor Boissrée als Kunstsammler, Ein Beitrag zur Geschichte der Romantik.* Jena (1916). Anhang III Die Boisserée=Galerie (S. 449-490).

(5) Annemarie Gethmann-Siefert, Bernadette Collenberg-Plotnikov, Elisabeth Weiser-Lohmann (hrsg.), *Kunst als Kurturgut,* Bd.1: Annemarie Gethmann-Siefert (hrsg.), *Die Sammlung Boisserée, Von privater Kunstbegeisterung zur kulturellen Akzeptation der Kunst,* München (2011)

(6) Sulpitz Boisserée, *Tagebücher.* Hans-J. Weitz (hrsg.), Bd. 1 S.244, Darmstadt (1978)

(7) A. W. Schlegel. *Vorlesungen über schöne Litteratur und Kunst.* 1. Teil: 1801-1802, 2. Teil: 1802-1803, 3. Teil: 1803-1804. in *Deutschen Litteraturdenkmalen des 18. Und 19. Jahrhunderts.* Bd. 17-19. Heilbron (1884).

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計13件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 小島　優子、奥田　太郎（共著）	４．巻 74
２．論文標題 「道徳的進歩(moral progress)とは何か、それはいかにして可能なのか」	５．発行年 2023年
３．雑誌名 『哲学』（日本哲学会）	６．最初と最後の頁 4-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 落合　桃子	４．巻 第56巻第1号
２．論文標題 「ペーター・フォン・コルネリウスとズルピーツ・ボアスレー：周辺人物を含めた交流について」	５．発行年 2024年
３．雑誌名 『福岡大学人文論叢』（2024年6月刊行予定）	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 片山　善博	４．巻 16
２．論文標題 「ヨーロッパのもう一つの伝統――科学と芸術の間」	５．発行年 2023年
３．雑誌名 『環境思想・教育研究』編集委員会編	６．最初と最後の頁 11-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 石川　伊織	４．巻 Vol. 28
２．論文標題 「ヘーゲルにとって、そして我々にとって、「哲学史」とは何か」	５．発行年 2022年
３．雑誌名 『ヘーゲル哲学研究』	６．最初と最後の頁 43-55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 小島　優子	4．巻 96巻別冊
2．論文標題 「男女共同参画と若手支援のこれから――本学会会員アンケート調査から考える――ワークショップ　コメント」	5．発行年 2023年
3．雑誌名 『宗教研究』	6．最初と最後の頁 311-312
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 上原　星奈、 清水　裕子、 小島　優子　共著	4．巻 27(1)
2．論文標題 「複線径路・等至性モデル（TEM）を用いた看護学生のスピリチュアルケア過程の検討」	5．発行年 2023年
3．雑誌名 『香川大学看護学雑誌』	6．最初と最後の頁 13-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 片山　善博	4．巻 116
2．論文標題 「社会福祉哲学についての一つの素描」	5．発行年 2023年
3．雑誌名 『福祉研究』（日本福祉大学学内学会）	6．最初と最後の頁 55-61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 落合　桃子	4．巻 第192冊
2．論文標題 神々の世界から英雄の世界へ―ペーター・フォン・コルネリウスによるグリュプトテークのフレスコ画について―	5．発行年 2022年
3．雑誌名 美術史	6．最初と最後の頁 155-170
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 石川　伊織	４．巻 Vol. 6 No.5
２．論文標題 「「美学」概念はいかにして形成されたか？」	５．発行年 2021年
３．雑誌名 『頸城野郷土資料室学術研究部研究紀要』	６．最初と最後の頁 P．1-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 神山　伸弘	４．巻 Vol. 56
２．論文標題 「学問的認識論としての『精神の現象学』序文――（その六）第三八段落～第四〇段落」	５．発行年 2021年
３．雑誌名 『跡見学園女子大学文学部紀要』	６．最初と最後の頁 P．13-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 神山　伸弘	４．巻 Vol. 27
２．論文標題 「自由と自然の境界と越境――ヘーゲル『法の哲学』における正邪の論理――」	５．発行年 2021年
３．雑誌名 『ヘーゲル哲学研究』（日本ヘーゲル学会）	６．最初と最後の頁 P．68-84
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 片山　善博	４．巻 第142号
２．論文標題 「社会福祉理念の再検討――ヘーゲル法哲学の視点から」	５．発行年 2021年
３．雑誌名 『現代と文化』	６．最初と最後の頁 P．63-78
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 小島　優子	4．巻 第69号
2．論文標題 「ヘーゲル哲学における生と死の継承――『精神現象学』と『法哲学』を中心に――	5．発行年 2020年
3．雑誌名 『高知大学学術研究報告』	6．最初と最後の頁 P．27-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計40件（うち招待講演　5件／うち国際学会　1件）

1．発表者名 片山　善博
2．発表標題 「ゲーテの芸術論とヘーゲル」
3．学会等名 名古屋哲学研究会9月例会
4．発表年 2023年

1．発表者名 片山　善博
2．発表標題 「ボアスレ往復書簡：絵画収集と交友関係に関する抄訳・ボアスレとゲーテ往復書簡についての検討」
3．学会等名 本研究のための研究会（2023年9月17日　ZOOM）
4．発表年 2023年

1．発表者名 小島　優子
2．発表標題 「ボアスレ往復書簡にみる絵画館に関する言及・ボアスレとソリーの往復書簡についての検討」
3．学会等名 本研究のための研究会（2023年9月17日　ZOOM）
4．発表年 2023年

１．発表者名 神山　伸弘
２．発表標題 「ボアスレ自伝の検討ボアスレの日記から絵画論についての検討」
３．学会等名 本研究のための研究会（2023年9月17日　ZOOM）
４．発表年 2023年

１．発表者名 落合　桃子
２．発表標題 「ボアスレ＝ヴァルラフ、ボアスレ＝リーヴァスベルク往復書簡の検討」
３．学会等名 本研究のための研究会（2023年9月17日　ZOOM）
４．発表年 2023年

１．発表者名 石川　伊織
２．発表標題 「ボアスレの往復書簡で言及される画家一覧に関する検討・A.W.シュレーゲルの1801/02年ベルリン講義の絵画論についての検討についての検討・シェリングのイエナ美学講義の絵画論」
３．学会等名 本研究のための研究会（2023年9月17日　ZOOM）
４．発表年 2023年

１．発表者名 石川　伊織
２．発表標題 「ドイツ調査報告および所在地別ボアスレコレクション作品一覧（更新版）について」
３．学会等名 本研究のための研究会（2024年3月23日　ZOOM）
４．発表年 2024年

１．発表者名 神山　伸弘
２．発表標題 「本年度の研究活動総括・ロマン主義とはなにか？」
３．学会等名 本研究のための研究会（2024年3月23日　ZOOM）
４．発表年 2024年

１．発表者名 小島　優子
２．発表標題 「ヴィンケルマンの書簡：ゲーテのヴィンケルマン評価」
３．学会等名 本研究のための研究会（2024年3月23日　ZOOM）
４．発表年 2024年

１．発表者名 片山　善博
２．発表標題 「ゲーテ『芸術と古代』に見るボアスレおよびそのコレクションの評価」
３．学会等名 本研究のための研究会（2024年3月23日　ZOOM）
４．発表年 2024年

１．発表者名 落合　桃子
２．発表標題 「ペーター・フォン・コルネリウスとズルピーツ・ボアスレー――周辺人物を含めた交流について――　」
３．学会等名 本研究のための研究会（2024年3月23日　ZOOM）
４．発表年 2024年

１．発表者名 片山　善博
２．発表標題 「ゲーテの絵画論について」
３．学会等名 社会文化学会・中部部会
４．発表年 2022年

１．発表者名 片山　善博
２．発表標題 「ヨーロッパのもう一つの伝統：科学と芸術の間」
３．学会等名 環境思想・教育研究会第22回研究定例シンポジウム
４．発表年 2022年

１．発表者名 Yuko KOJIMA
２．発表標題 Das Erbe von Leben und Tod in Hegels Philosophie　Eine internationale Tagung zur Hegelschen Philosophie: Mit dem Hauptvortrag: Professor Klaus Vieweg
３．学会等名 Universitaet Hiroshima（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 小島　優子
２．発表標題 「男女共同参画ワークショップ　コメント「日本哲学会と日本宗教学会における男女共同参画調査の比較」
３．学会等名 日本宗教学会大会（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 片山　善博
２．発表標題 「ゲーテと絵画～絵画論からみるゲーテの現象学」
３．学会等名 臨床協働研究会
４．発表年 2023年

１．発表者名 小島　優子
２．発表標題 「ヴィンケルマンの書簡」
３．学会等名 本研究のための研究会（2023年3月6日・7日　新潟県立大学）
４．発表年 2023年

１．発表者名 落合　桃子
２．発表標題 「ペーター・フォン・コルネリウスとズルピッツ・ボアスレ―ボアスレの日記と書簡から―」
３．学会等名 本研究のための研究会（2023年3月6日・7日　新潟県立大学）
４．発表年 2023年

１．発表者名 石川　伊織
２．発表標題 「Atheneumの絵画論　A.W.Schlegelの対話篇」
３．学会等名 本研究のための研究会（2023年3月6日・7日　新潟県立大学）
４．発表年 2023年

１．発表者名 神山　伸弘
２．発表標題 「Petra Maisak, ”Goethe und die Sammlung Boisseree in Heidelberg", SPUREN, 35, Marbach am Neckar 2000.の前半部訳出紹介」
３．学会等名 本研究のための研究会（2023年3月6日・7日　新潟県立大学）
４．発表年 2023年

１．発表者名 片山　善博
２．発表標題 「ヴァイマール・ミュンヘン調査報告」
３．学会等名 本研究のための研究会（2023年3月6日・7日　新潟県立大学）
４．発表年 2023年

１．発表者名 石川　伊織
２．発表標題 ボアスレの絵画観の成立
３．学会等名 本研究のための研究会（2022年9月25日　高知大学）
４．発表年 2022年

１．発表者名 小島　優子
２．発表標題 ヴィンケルマンに対する評価
３．学会等名 本研究のための研究会（2022年9月24日　高知大学）
４．発表年 2022年

１．発表者名 落合　桃子
２．発表標題 美術史家としてのハインリヒ・グスタフ・ホトー―『ドイツ・ネーデルラント絵画史』を中心に―
３．学会等名 本研究のための研究会（2022年9月24日　高知大学）
４．発表年 2022年

１．発表者名 神山　伸弘
２．発表標題 ゾルガーの独自のポジションについて――若干の書簡から――
３．学会等名 本研究のための研究会（2022年9月24日　高知大学）
４．発表年 2022年

１．発表者名 片山　善博
２．発表標題 色彩論をめぐるゲーテとボアスレ
３．学会等名 本研究のための研究会（2022年9月25日　高知大学）
４．発表年 2022年

１．発表者名 石川　伊織
２．発表標題 「ヘーゲル美学講義の史的位置づけ　同時代の芸術哲学との比較を通して」
３．学会等名 本研究のための研究会（ZOOMによるオンライン開催）
４．発表年 2020年

１．発表者名 石川　伊織
２．発表標題 「「美学」概念はいかにして形成されたか？」
３．学会等名 本研究のための研究会（ZOOMによるオンライン開催）
４．発表年 2021年

１．発表者名 石川　伊織
２．発表標題 「ヘーゲルにとって、そして我々にとって、「哲学史」とは何か」
３．学会等名 日本ヘーゲル学会第32回研究大会　ヘーゲル生誕250年記念シンポジウム「ヘーゲルと哲学史」（オンライン開催）（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 石川　伊織
２．発表標題 「美術アカデミーの歴史を復習する」
３．学会等名 本研究のための研究会（ZOOMによるオンライン開催）
４．発表年 2021年

１．発表者名 落合　桃子
２．発表標題 「ドイツ語圏の美術アカデミーについて」
３．学会等名 本研究のための研究会（ZOOMによるオンライン開催）
４．発表年 2020年

１．発表者名 落合　桃子
２．発表標題 「ヘーゲル周辺の3人の画家――クセラー・シュレージンガー・ケスター」
３．学会等名 本研究のための研究会（ZOOMによるオンライン開催）
４．発表年 2021年

１．発表者名 落合　桃子
２．発表標題 「彫刻・浮彫・絵画――ヘーゲルの肖像にみるジャンルの比較――」
３．学会等名 本研究のための研究会（ZOOMによるオンライン開催）
４．発表年 2021年

１．発表者名 神山　伸弘
２．発表標題 「理性・現実一体把握の美学による深化――ゾルガーとヘーゲルの相互作用研究（１）――」
３．学会等名 本研究のための研究会（ZOOMによるオンライン開催）
４．発表年 2020年

１．発表者名 神山　伸弘
２．発表標題 「自由と自然の境界と越境――ヘーゲル『法の哲学』における正邪の論理――」
３．学会等名 日本ヘーゲル学会第31回研究大会シンポジウム「『法哲学』刊行200周年　現代刑法論とヘーゲル――ヘーゲル『法哲学』のアクチュアリティ」（オンライン開催）（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 神山　伸弘
２．発表標題 「ゾルガーの『エルヴィン』について」
３．学会等名 本研究のための研究会（ZOOMによるオンライン開催）
４．発表年 2021年

１．発表者名 神山　伸弘
２．発表標題 「『ゾルガー遺稿集』目次の編集について」
３．学会等名 本研究のための研究会（ZOOMによるオンライン開催）
４．発表年 2021年

１．発表者名 片山　善博
２．発表標題 「「人格」概念と社会福祉の理念」
３．学会等名 第40回法政哲学会研究大会シンポジウム「ヘーゲル『法(権利)の哲学』刊行200年記念」（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 小島　優子
２．発表標題 「Wolfgang von Wangenheim, Der verworfene Stein Winckelmanns Leben, Matthes & Seitz Berlin, 2005.について」
３．学会等名 本研究のための研究会（ZOOMによるオンライン開催）
４．発表年 2021年

１．発表者名 小島　優子
２．発表標題 「ゲーテ『ヴィンケルマンとその世紀』について」
３．学会等名 本研究のための研究会（ZOOMによるオンライン開催）
４．発表年 2021年

〔図書〕　計4件

１．著者名 編集責任：石川伊織、海老澤善一、山口誠一　訳者：碚智樹、片柳榮一、早瀬明、松風篤	４．発行年 2023年
２．出版社 知泉書館	５．総ページ数 420
３．書名 『ヘーゲル全集』第13巻　評論・草稿Ⅰ（1817-25）	

１．著者名 小島　優子	４．発行年 2023年
２．出版社 社会評論社	５．総ページ数 252
３．書名 『ヘーゲル『精神現象学』をどう読むか－新たな解釈とアクチュアリティの探究』（片山善博・小井沼広嗣・飯泉佑介編著）　「第５章　『精神現象学』における「犠牲」の意味――「宗教」章を中心に」	

１．著者名 片山　善博	４．発行年 2023年
２．出版社 社会評論社	５．総ページ数 252
３．書名 『ヘーゲル『精神現象学』をどう読むか－新たな解釈とアクチュアリティの探究』（片山善博・小井沼広嗣・飯泉佑介編著）　「人格と承認――ヘーゲルと福祉思想」	

１．著者名 片山　善博	４．発行年 2023年
２．出版社 大月書店	５．総ページ数 200
３．書名 『生命の倫理学』「死生学」	

〔産業財産権〕

〔その他〕

ヘーゲルの芸術体験
http://www2.mmc.atomi.ac.jp/~kamiyama/hegel/kunst/index-kunst.html
ヘーゲル美学講義における絵画論の芸術哲学的な意義とボアスレ・コレクション
https://www.idealismus.sakura.ne.jp/kunst/
石川伊織研究室
http://www.idealismus.sakura.ne.jp/unii/
ヘーゲル芸術哲学研究
http://boissereel827.sakura.ne.jp
ヘーゲルの芸術体験
http://www2.mmc.atomi.ac.jp/~kamiyama/hegel/kunst/index-kunst.html
ヘーゲル美学講義における絵画論の芸術哲学的な意義とボアスレ・コレクション
https://www.idealismus.sakura.ne.jp/kunst/
石川伊織研究室
http://www.idealismus.sakura.ne.jp/unii/
ヘーゲルの芸術体験
http://www2.mmc.atomi.ac.jp/~kamiyama/hegel/kunst/index-kunst.html
石川伊織研究室
http://www.idealismus.sakura.ne.jp/unii/
石川伊織研究室
http://www.idealismus.sakura.ne.jp/unii/

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	落合　桃子 (Ochiai Momoko) (40434237)	福岡大学・人文学部・准教授 (37111)	
研究分担者	神山　伸弘 (Kamiyama Nobuhiro) (60233962)	跡見学園女子大学・文学部・教授 (32401)	
研究分担者	片山　善博 (Katayama Yoshihiro) (60313433)	日本福祉大学・社会福祉学部・教授 (33918)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	小島　優子 (Kojima Yuuko) (90748576)	国立研究開発法人国立国際医療研究センター・国立看護大学校・教授 (82610)	

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	柴田　隆行 (Shibata Takayuki)		元東洋大学教授

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関